

実施期日	令和8年8月4日（火）
部会名	小学校 特別の教科 道徳部会

概要報告

研究主題 『主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善』
（含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実）

テーマ

『対話を活用した深い学び』

～ “心の揺れ” を語り合う葛藤場面を通して（第6学年教材より）～ 』

提案概要

○学年・単元（題材） 第6学年 内容項目A【正直・誠実】 題材「手品師」

学校教育目標の一つである「すじ道を立ててよく考える子」の育成を踏まえ、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」という道徳教育目標を設定した。実態として日頃の道徳の授業では「正しい答え」を意識した発言が多く見られ、価値理解のみで終わり、自己の生き方について深く考える学びにつながりにくいという課題があった。そのため正解探しをする授業ではなく、考えや意見に迷いが生まれ、対話ができる授業を意識した。そして、主人公の葛藤を自分事として捉え迷うためには、本音に出会う必要があると考えた。本音を引き出すための手立てや工夫が以下である。

（1）手立てと成果

手立て① 児童の本音を引き出す発問の工夫

「正しい答え」を求める発問ではなく、児童が迷いや葛藤を感じる発問を意図的に設定し、自分事として考えたい問いを中心に据えた。それによって、「正しさ」を答えるだけでなく、「分かっているけど揺れる自分」を言葉にする姿が見られた。

手立て② すじ道を立てて考える対話の工夫

最初に個人で考える時間を十分に確保し、自分の考えや理由をもたせる。その後、ペアで対話をし、安心した雰囲気考えを共有できるようにした。葛藤を伴った発言が多く見られたり、元の考えから他の考えへと変わったりと変容が見られた。また、他者との対話を通して自分の価値観を見つめ直し、考えを再構成していく姿は、「すじ道を立ててよく考える子」の育成につながるものであった。

手立て③ 心情を可視化した板書の工夫

児童が発問から考えたり、共有し合ったりした意見や言葉を活かした板書であった。主人公の心情を可視化したことは、道徳的価値の葛藤を構造的に理解させる上で有効であった。

手立て④ 単発授業だからこそ生まれる主体性

担任ではない教師による単発授業だからこそ、児童が素直な思いを表出する場面が見られた。担任と共有することで、さらなる児童理解へつながった。

（2）課題

児童の考えをさらに深めるためには、教師による「揺さぶりの発問」の工夫が必要。対話が一方方向になったり、意見交流で止まってしまったりする場面が見られた。児童の価値観を揺さぶる発問を適切な場面で適宜行うことで、さらに多面的・多角的な思考につながられたのではない

か。また、発言する児童が偏る場面もあったため、小グループ交流やネームプレートの活用など、より多くの児童が安心して参加できる手立ても検討していきたい。

質疑応答・感想

○成果と課題がよく分かった。見えないところでも個別最適化していたり、視覚的に分かりやすく板書をしていたり、自分の意見を安心して伝えられる授業だったのではないかな。

Q：板書では、曲線を使って主人公の葛藤を表していた。他の板書の工夫も教えてほしい。

A：構造的に考えたこと、子どもの意見からキーワードを書いたこと、チョークの色分けをしたこと、キーワードの配置や書く位置なども意識し、思考が視覚的に分かりやすくなるようにした。

協議の柱及び協議概要

協議の柱 『「自分の本音を言える」ようにするための、引き出す工夫』

キーワード①、②についてと、①、②の課題や困り感を共有した。

① 意見を述べやすくなるための手立て

- ・否定されることのない雰囲気づくり、道徳の授業のルール確認
- ・個人の考えをもつ時間を設ける。（ノートやワークシートに記入）
- ・意見を視覚化する。（スケールで表す。ネームプレートを使う。）
- ・移動式交流タイムをとる。（例：自分と違う意見の人の話を聞きに移動する）
- ・ICTを活用。学習支援アプリケーションに匿名で意見を共有する。→意見が言いやすくなる。
- ・登場人物になりきって演じたり、セリフを考えたりする。（低学年）

●意見をもつこと自体に準備が必要。

●発言をする人が偏ってしまう。

●即興で揺さぶりの問い返しができない。

●板書の工夫ができるように、スキルを高めなければならない。

●教材の説明は正解として教えることになっているのではないかな。

●内容項目によって、本音が引き出しやすい教材と引き出しにくい教材がある。

② 児童から出た意見を深める終末の工夫

- ・変容を見取るために、最初の発問や内容項目に戻る。
- ・生活に落とし込むために、日常の場面や出来事に戻す。
- ・モヤモヤして終わることがあってよい。（葛藤したからこそその終わり方）

●終末の流れが分からない。

●オープンエンドで終わってよいのか。

まとめ概要

価値理解のみで終わる授業ではなく、自己の生き方につなげていくための授業づくりが大切である。自分の考えや価値観を知り、他者の考えや意見に触れることを通して、自問自答を繰り返し、考えや意見が変わったり（変容）、多様な価値観を受容していったりすることが、自己の生き方につながっていくのではないだろうか。また、児童の本音を引き出すためには、教師が「正しい答え」に導くのではなく、葛藤を大切にしながら問いを投げかけることが重要である。

本実践では、市を越えた小学校と中学校が授業参観を行い、授業や指導について語り合うことで見えてきたことがあった。子どもの成長を見通した授業作りをしていくことが大切であると実感した。小中連携でつなぐ道徳教育を今後も実践していけたら幸いである。